

THE 柔道人

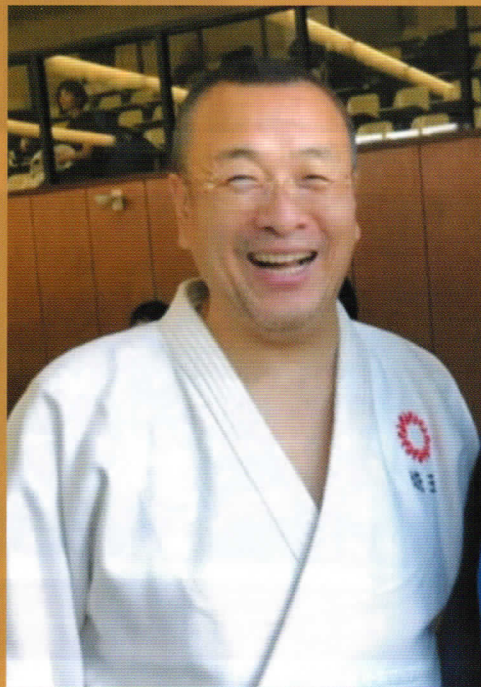
第13回

小池雅彦 (日本)

柔道を愛する仲間たち

柔道の創始者、嘉納治五郎先生も教育者であった。「教育のこと、天下これより偉なるはなし、一人の徳教、広く万人に加わり、一世の化育、遠く百世に及べり」師が述べた言葉である。今日紹介する小池先生も高校で教鞭をとる教育者である。「柔道からすべてを教えてもらった」と熱く語っていた。

(文=ビエール・フラマン/広報委員)



不撓不屈の柔道教育者

PROFILE

こいけ・まさひこ
1961年8月31日生
日本大学文理学部体育学科 卒業
埼玉県立高校教員
柔道七段
全国高段者大会:27回出場
2006年~全柔連大会事業委員会委員
2019年~全柔連大会事業委員会副委員長



本職は高校の教師。感情的に怒ることはなく愛情をもって生徒を応援する

小池先生と私の出会いは、私が日本に来て間もなくでした。当時、私は教師として埼玉県の高校に勤務していました。しかしながら、柔道家の私にとって非常に残念なことにその学校の柔道部員は3人しかいませんでした。落胆する私に氣遣ったある先生が、県の会合に出席した際、私を練習に迎え入れてくれるところはないかと打診してくれました。

その声かけに真っ先に手を挙げてくれたのが、今回ご紹介する小池先生だったので。彼は私を歓迎してくれた最初の人物です。今でも覚えているのは、彼は練習に行くときに私を誘い、車で一緒に行ったりしたこと。そして、次々に日本の柔道を紹介してくれました。

今も交流は続いています。彼を知れば知るほど、彼が本物の柔道家であることが

わかります。彼は、礼儀正しき、正直さ、挑戦する勇氣、情熱を兼ね備えていて、そして、自分のためだけでなく社会に大きく貢献していく人材を育てたいと願う人物です。

今回はそういう小池先生を紹介します。先生が柔道をはじめたのは中学1年生12歳のとき。深く考えたわけではなく、進学した中学に柔道部があったこと、体が大きかったこと、先輩に誘われ、おもしろそうだったこと、先輩に誘われ、おもしろそう

しかし、いざ始めたらとにかく楽しかったという。それまでは、何をやってもそれほど、うまくいかなかったが、柔道は違っていた。教わった技はすぐにできて、柔道がどんどん好きになっていった。高校進学も、尊敬する柔道部の先輩がいて、その先輩を追いかけ先輩と同じ高校に進学。そし

て柔道部に入部。

そんな柔道大好き少年だった先生だが、試合の成績は全然ダメだったという。それでも嫌にならなかったのかと質問したら、「嫌ではなかったです。強い人はいると思いましたが」と。振り返れば、高校時代の練習はすぐくきつかったという。なのに、なかなか勝てない「つまり、コストパフォーマンスが悪かったんです」と笑いとばした。現在、小池先生は埼玉県の高校教師であるが、自身が高校生のときに高校柔道は素晴らしいと思いい、一生高校柔道に関わりた

いと思つたと話してくれた。そして先生は高校の教師を目指し、日本大学に進学。しかし、「日大柔道部」への道のりは平坦ではなかった。日大進学は試合の成績もなかったもので、まず、一般入試で臨み合格。ところが、日大柔道部は少数

精鋭の部で、いくら入試で受かって日大生であっても、入部はダメだと断られた。しかし、先生は諦めなかった！

部員としては認められないが、練習には来ていいとは言われた。1年生、2年生はいわゆる見習い部員。努力を積み重ね、3年生になってついに部員と認められ、道場に名札もかかった。当時について語ってくれた。「思っていたより、相当つらかったです。でも、周りにいい仲間がたくさんいました。ひどい目にも遭いましたが、いい人たちがたくさんいたので、今があります。本当に日大柔道部に入れてもらったおかげです」と感謝を絶やさない人柄がにじみ出た。

実は日大のなかには文理学部にも柔道部がある。しかし、そこは同好会。先生は自分の力を考えたなら、そちらのほうがちよ

どよかたたと話していた。

ではなぜ、先生は日大柔道部を目指したのか。『日大柔道部』というすごい世界があるのに、そこを知らないで同好会で柔道をして、学校の先生になつていいの？ 本当のすごい世界を知らないでいいの？ と自問自答をしたのだという。

とはいえ、たくさん投げられた。でも、辞めようと思ったことは一度もなかった！ と言い切る。「1年生のときは立ってられないほどだったのですが、でも無理だから辞めようと思ったことは一度もないです。強いなとは思いましたけど」(笑)

筆者である私も来日して柔道をする外国人に言う。「休んでも、全部やれなくても、やはり真面目にやりましょう」と。そのことが重要だと彼に共感する。

現在の目標について聞いてみた。

「今は、自分は柔道七段で、練習して八段を目指して高段者大会に出続けています。健康に気をつけて頑張っています」とのこと。向上心は柔道を始めたときと変わらない。

さらに指導者として、生徒に対して「勝つばかりが柔道ではないので、関東大会や全国大会を目指して練習する過程で成長してもらい、最終的には社会で活躍してほしい」と願っている。

そんな先生に接すると、本当に尊敬に値する先生だと思う。生徒に対して多くを語らなくても彼の背中があるべき姿を教えてくださいませんか。

私を知っている先生の教師としての印象は、感情的に怒らず、生徒に対して愛情をもって応援し指導している心が広い人物。

嘉納治五郎先生が願う真の柔道家とはこういう人ではないだろうか。

また、先生は全柔連で大会事業委員会の副委員長も務めている。そして、東京オリンピックの運営に携わり、多忙な日々を送っている。

ここに、彼のポリシーを紹介したい。

「自分に依頼がきた仕事は基本断らない方針です。なぜなら、オフアワーがあるということは必要とされていると感じるからです。ありがたいと思つて引き受けます。そして、それが、回り回つて自分だけではなく、自分の生徒のためにもなつていくと信じています」と。自他共栄の精神ではないか。

「必要とされれば、やれるだけのことをして恩返しをしたいと思います。自分にとつて、柔道は先生みたいなもの。なんでも教えてもらった。あいさつや返事や言葉遣い、苦しいときも頑張るなど。年齢を考えると時間は限られています。自分で練習もしたいし、試合にも出たい。今があるのは、柔道のおかげからです」



現在、柔道七段の小池先生は八段を目指して日々精進を重ねている。向上心は若い頃と変わらない

もし、柔道との出会いがなかったら？ と質問してみた。

「柔道と出会わなかったらなんて想像できません！ 柔道に出会えたおかげでいろいろな人との出会いにも恵まれました」

どこまでも、謙虚な人柄である。すごいと思うことはやはり、諦めなかったこと。不撓不屈の精神。仕事は引き受けたからには、一生懸命仕事をして、自分を信頼して依頼した方に応えようという心にかけている。その心情にも私は共感する。

最後にもう一つ。先生はオープンマインドの人である。高体連のデスクオブ柔道の国際交流担当もしている。「よく、海外の人を敬遠する人がいると聞きますが、自分は海外の人とも積極的に交流したいです。柔道のチャンネルで海外の友だちも増えています」

筆者である私の存在を聞きつけ、真つ先に会いたい！ と言ってくれた先生に感謝感謝である。



グラッドスラム大阪2019にて。IJFのニール・アダムス氏と

**DYNAMIC PARTS.
CHANGE OUR WORLD**

ダイナミック・パーツで明日の世界を創る

TPR

TPR株式会社
<http://www.tpr.co.jp>

<https://www.kusakura.co.jp>

KUSAKURA

株式会社 九櫻

本社 〒582-0007 大阪府柏原市上市3-11-21

大阪支店 TEL072-973-1021(代)
東京支店 TEL03-3626-5081(代)
九州支店 TEL092-483-0371(代)